フィリップ・キノー『アマラゾント』における人物造形

髙 安 理 保

はじめに

王の偉大な俳優たちは、
華やかで素晴らしい面々で
『アマラゾント』を演じる、
これは鋳鉄の心をも魅了する、
それほどに話は巧みで、
それほど美しい場面に満ち、
つまり、（人がよく言うところでは）それほどに
洗練され、愛あふれ、心に触れる作品なのである。[1]

「洗練され、愛あふれ、心に触れる」作品として、フィリップ・キノーの悲喜劇『アマラゾント』*Amalasonte* は、甘美な愛の表現で高く評価されたことがわかる。こうして「鋳鉄の心をも魅了する」この作品は、1657 年 11 月 28 日（あるいは 29 日）、プティ・ブールにて、拍手喝采を以て受け入れられた。宰相マザランが、亡命中であったスウェーデンのクリスチナ女王のために上演させたのである。『アマラゾント』は同年 11 月 9 日、オテル・ド・ブルゴーニュ座にて初演を迎え、その 5 日後にルイ 14 世が観劇している。また、11 月 19 日にはルーヴル宮にて上演されており、わずか 5 日ばかりの間に王が 2 度も観劇したことになる[2]。このことからもわかるように、作品の評判は素晴らしく、マザランはこれが国賓をもてなすのに十分耐え得るものだと判断したのであろう。この作品に対する観客の熱狂は、次のように伝わっている。

ブルゴーニュ座の俳優たちは
ある劇詩を上演した、
それは大変素晴らしく、類まれなるもので、
最も魅力あるものの数々に匹敵し、
皆がその価値を認め、
誰もが我先にとそこに押し寄せる。
つまり、その作品の秀逸さは並外れていて、
我らが王に至るまで、

水曜日に、その上演を見て、
喜んでそれを褒め称え、
どの詩行も大変立派だと思われて、
王は100ジュストを授けたのであった、
(これはかわいいピノー嬢が私に教えてくれたことだが)
受け取ったその作者は〝キノー〟というが、
私は記したいと思った、まったく特別に
ここに大文字で、その名を。
なぜなら私はその素晴らしい才能を大いに気に入っているからだ。
とにかく、この大変な値打ちがある劇詩について、
人は口々に誉めそやしているが、
その題目は『アマラゾント』という。[3]

出版に関しては、1658年に初版が出た後、早くも1661年にはパリで再版されており、1658年から1662年までに4つ以上の海賊版が出ている[4]。こうした状況を鑑みても、やはり作品の人気がうかがえる。『アマラゾント』の大成功は、当時衰退しつつあった悲喜劇というジャンルの終焉を先延ばしにした。

作者であるキノーは、現代ではオペラ作家としてその名が聞かれるばかりだが、オペラに取り組む以前には劇作家としてのキャリアを持つ。多作で人気があり、「恋の繊細さをうまく表現する」[5]と評判であった。『アマラゾント』がこれほどの成功を収めた理由も、キノーのこうした特長にあると言えよう。キノーは歴史の一挿話を愛の物語として巧みに生まれ変わらせた。まだ若く多感な年頃であった王にとって、この作品が大いに琴線に触れるものであったのも無理からぬことである。この作品において主要な登場人物たちの言動を動機づけているのは恋心であり、実に、「愛」« amour » という語だけでも、使用回数は70回を数える。作中いたるところで愛を語る台詞に突き当たるわけだが、これを読み解くと、登場人物の性格や気質に応じて、愛が様々に異なる性質を帯びて現れていることがわかる。すなわち、キノーにとって愛は人物造形の要素なのであって、その性質の差異が登場人物の個性を際立たせている。そこで本論では、四人の主要人物に焦点を当て、それぞれにおける愛の在り方を検討しながら、キノーの人物造形についての考察をおこなう。

尚、『アマラゾント』の邦訳については戸口民也氏並びに野池恵子氏による共訳[6]が入手可能であり、註のない本文引用箇所はこれに拠っている。

I、梗概

物語の舞台となるのはローマである。中心的な登場人物としては、アマラゾント、テオダ、クロデジル、アマルフレードが挙げられる。まず、ヒロインのアマラゾントは、ゴート国ならびにイタ

リアの女王であり、テオダを愛している。テオダは摂政の息子であり、こちらもアマラゾントを愛している。この二人を、大公クロデジルと、その妹アマルフレードの陰謀が取り巻く。兄クロデジルは恋敵テオダの失墜を画策するが、彼がアマラゾントとの結婚を望むのは決して彼女を愛しているからではなく、父の復讐のため、アマラゾントを妻とした暁には彼女に死を望むほどの苦しみを味わわせたいと思っているからである。一方、妹アマルフレードはアマラゾントの厚遇を得ている立場でありながらテオダに横恋慕しており、彼を手に入れることを目的としている。兄妹の策略の数々とそこから生じる誤解や行き違いの連続によって織りなされるサスペンスが作品の見どころとなっている。国の摂政でありテオダの父であるトゥディオンや、クロデジルの友人でありアマルフレードに想いを寄せているアルサモンも、副次的な登場人物ではあるが、物語の進行上重要な役割を担っている。

【第 1 幕】

クロデジルとアルサモンは、共通の恋敵であるテオダの失墜をひそかに画策しながら、表面上は態度をつくろって彼に追従する。クロデジルはジュスティニアン皇帝と通じ、テオダが国を裏切って皇帝に仕えると思わせる手紙をテオダ宛に書かせ、それをアマラゾントに届けさせた。トゥディオンがその咎で息子の逮捕を命じると、二人はテオダへの態度を一変させる。テオダは女王へ愛を打ち明ける手紙をしつらえ、アマルフレードに託す。彼女はその手紙を開封し読んでしまう。

【第 2 幕】

アマラゾントはテオダを呼び出して問い質す。テオダは自分宛の皇帝の手紙を読んで混乱し、自己弁護をしようともしないが、女王の命令に応じて身の潔白を訴える。女王は怒りを鎮め、テオダに王冠と結婚を約束する。女王はアマルフレードに喜びを打ち明けるが、アマルフレードはテオダからの手紙をわざと落としてアマラゾントに読ませ、自分宛の恋文だと信じ込ませる。女王は怒り、テオダの目通りを禁ずる。テオダは運命の急変に狼狽し、自らの死を望む。

【第 3 幕】

アマルフレードとクロデジルは互いに胸の内を明かす。テオダはアルサモンに連れられて女王の執務室へ向かうが、その道すがら、クロデジルは誤ってアルサモンの方を殺めてしまう。クロデジルはテオダを殺したと妹に告げ、女王にはテオダが暗殺されたと知らせるが、テオダがアルサモン殺害の咎で連れて来られる。アマラゾントはテオダの幽閉を命じるが、アマルフレードにひそかに頼んで彼を亡命させようとする。

【第 4 幕】

アマルフレードは女王からの命令を偽って、テオダが女王の面前に出ないよう仕向ける。怒ったアマラゾントはテオダの即時追放を言い渡し、一人になると、睡魔に襲われ眠り込む。テオダが何

としても女王に会おうとするので、アマルフレードはテオダの剣を抜き、それを彼に握らせ、目覚めたアマラゾントにテオダが女王殺害を企てたと信じ込ませる。クロデジルが本心を偽ってテオダの恩赦を願い出ると、女王は手紙をしつらえ、テオダに渡すよう彼に託す。クロデジルは後悔し復讐を誓う。

【第5幕】

アマラゾントはアマルフレードに真実を打ち明ける。クロデジルに託された手紙は恩赦を告げるものではなく、テオダを殺すために毒の仕込まれたものだった。トゥディオンによって裏切り者の死が報告される。アマルフレードは毒をあおり、アマラゾントにこれまでの企みのすべてを打ち明けて息を引き取る。憔悴したアマラゾントが気を失うと、死んだはずのテオダが現れる。実は、クロデジルが手紙を開け、その毒にあたり、トゥディオンに自らの罪を語って死んだのだった。意識を取り戻したアマラゾントはテオダと和解し、二人の結婚の準備が進められる。

II、原作について

キノーは、1656年にトマ・コルネイユの悲劇『ティモクラート』*Timocrate*が大当たりしたのを受け、『アマラゾント』ではそれまで得意としていたスペイン演劇の翻案から歴史ものに転向している。キノーより後に同じ題材を扱ったトマ・コルネイユの悲劇『テオダ』*Théodat* (1673) は原作としてフラビオ・ビオンドの『ローマ史』を挙げているが、キノーがどの程度これに頼ったかは定かではない[(7)]。ローマの歴史家たち、カッシオドルスやプロコピオス、ヨルダネス[(8)]の書が当時普及しており、キノーもこれらを読んだことが推測される。特に、オランダの学者グロチウスがプロコピオスやヨルダネスからエピソードを引き、ゴート、ヴァンダル及びランゴバルドの歴史書を編んでいるが、彼が1645年に没するまでの少しの間パリに住んでいたこともあって、その仕事はフランスに広く流布していた。ペローの回想録に、キノーがペローのサロンにてグロチウスの友人ホイヘンスと面識を持ったことが報告されている[(9)]。キノーが『アマラゾント』の執筆にあたってグロチウスの書に題材の多くを求めたであろうことは想像に難くない。

アマラゾントについて歴史的な事実として知られるところは次の通りである。アマラゾントは東ゴート王国第3代君主として君臨した女王であり、初代国王テオドリック大王の娘にあたる。大王の後継者としてはアマラゾントの夫エウタリックが定められていたが、エウタリックが結婚から数年後に亡くなったため、二人の息子アタラリックが大王の後継者となった。526年に大王が没すると、アマラゾントはまだ幼かった息子に代わって実際の政治をおこない、534年に息子が夭逝した後正式に女王となる。彼女の政治的手腕は確かなもので、ローマ元老院や教会との友好関係を築き、外国との同盟関係の確立にも努めた。一方で敵も多く、常に反対派の陰謀に悩まされ続けたが、そのうち何人かの暗殺には成功している。彼女は即位の折に、根強い反対派であり自身の従兄弟にあたるテオダの懐柔を試み、実権を持たないという条件のもと彼を共同統治者に指名する。しかしこれが

運の尽きで、テオダは条件を呑んだように見せかけ、不満分子を集めて水面下で陰謀を企てていた。ある日、アマラゾントは城内で捕らえられてウォルシニィ湖の島に流され、しばらくそこで過ごした後、入浴中に暗殺された。

キノーの『アマラゾント』では、物語の舞台がローマに移され、テオダとアマラゾント以外の登場人物はすべて作者の創作になっている。ちなみにアマルフレードは史実上はテオダの母の名だが、ここではテオダに想いを寄せる女性の名として用いられている。また、キノーはアマラゾントとテオダの親戚関係を描いていない。何より、キノーはこの二人の性格や関係性を大きく改変しており、二人の立場は歴史の伝えるところとは完全に逆転している。すなわち、テオダはアマラゾントに危害を加えるどころか、むしろ被害者然として描かれるのである。この改変について着想元を特定の作品に限定することは不可能である。キノーに先立ってアマラゾントを文学的主題として扱った例としてはスキュデリー嬢の『高名な女性たち』*Les Femmes Illustres* (1652) があるが、ここではアマラゾントが悲劇のヒロインとして理想化されているものの、テオダとの関係性は史実に倣っている。『アマラゾント』における二人の人物像はやはりキノーの創作と見做すのが妥当であろう。

III、テオダ

作中で最初に名前が語られるのが、主人公テオダである。まず、冒頭のクロデジルとアルサモンの会話を通して、テオダの立ち位置が明らかにされる。テオダは王族であるのみならず、その父は摂政という地位にあり、女王であるアマラゾント自身がテオダを愛している。クロデジル曰く、「やつはもうわれらと対等ではない、今後ますます力を強めて行くのだ」(1 幕 1 場)。まさに幸運の極みにある人物というわけである。

この作品において、テオダとアマラゾントは最初から想い合っている。キノーは、史実上は卑劣で残忍な人殺しであったテオダを、穏やかで心優しい、恋する主人公として仕立て上げた。テオダのアマラゾントに対する愛は第一に臣下としての敬愛であって、女王への忠誠と服従が彼の言動の軸となっている。換言すれば、彼の性格は極めて受動的であり、それゆえに彼は幾多の困難に突き当たる。まず、彼は政敵と内通したという大罪を着せられ、女王から尋問されても、自己弁護をしようとしない。彼にとって恐ろしいのは、自らの名誉が失われることよりも、女王の栄光に傷が付くことなのである。彼は、名誉どころか命さえも進んで差し出そうとする (2 幕 4 場)。

いまここで皇帝の手紙の嘘をあばくこともできますが、
私の誠意を示すことは、陛下の誤りを示すことになりましょう。
気高くも愛すべき陛下、たとえ身の潔白を訴えるためでも、
陛下は間違っているなどと、私には言えません。
かくも秀でた精神が誤りを犯すこともあったと
人に知らせるくらいなら、私はむしろ死を選びます。

いまここで、陛下に間違いを認めさせるより、
私が間違って罰せられたほうがましというもの。

テオダはこの時、弁明を強く要求するアマラゾントの命令に応える形で事なきを得るが、それはアマラゾントの側にまだテオダの愛に対する疑念が生まれておらず、女王自身が彼の無罪を求めているからこそ与えられた機会である。実際、テオダは女王への愛を恃みにして訴え、アマラゾントはこれを受け入れる。

この裏切りの弁明に、
私が頼みとするのは理屈よりも愛です。
私は陛下を心から愛しています、誰もが知っているように、
心から愛する人を裏切ったりはしないはず、
それに、純粋な愛の火を女王に対して燃やすなら、
恋する男は最良の臣下となるはず。
ですから私は、理屈を並べて弁明する気はありません。
私の愛を知っていただけるなら、私の潔白も知っていただけるでしょう、

ところがこの後、アマルフレードの策略に唆されたアマラゾントは、テオダへの態度を急変させる。テオダは女王に敬意を払うあまり、彼女と直接言葉を交わすよりもアマルフレードに言葉を託そうとするが、こうした態度が仇となって彼を窮地に追いやっていく。彼の愛ゆえの従順さが裏目に出るのである。さらに、アルサモン殺害の嫌疑をかけられたテオダは、アマラゾントの怒りに怖気づき、アマルフレードにとりなしを頼むが、これが一層誤解を深める結果となる。

しかしテオダは機械的に服従しているのではない。時に、彼の愛は臣下としての領分を超えた行動を促す。テオダは、アルサモン殺害の咎で国外追放の命令を受けた時、アマルフレードの抑止を振り切ってアマラゾントに会いに行こうとする（4幕1場）。

あなたは、愛も、愛の力もご存じない！
まばゆければまばゆいほど、愛の炎は完全となる、
なすべきことしかしないようなら、
恋人の熱意もしれたもの。
自分の思いに反してまでも従うことは美しい、
だがそれは臣下のすること、恋人のすることではありません。
愛を知る人なら、わが身をかりたてる愛をはばむものはすべて
罪とみなさなければなりません。

テオダがアマルフレードに向けたこの台詞は、皮肉にも、アマルフレードの行動を擁護しかねないものになっている。着目すべきは、アマルフレードが女王の命令という口実を使って彼が女王に会うことを阻もうとしていることである。すなわち、ここでテオダは意思を持って女王の命令に背いているということになる。テオダにとっての最優先事項は、実は女王に従うことではない。女王に会うことなのである。アマルフレードが言っていたように[10]、会いたいという気持ちにこそ愛の本質がある。クロデジルやアマルフレードによって仕組まれた策略の数々は、テオダにとっては言わば愛の試練になるわけだが、物語が進むほどに、つまり厳しい状況に追い込まれるほどに、テオダの意思は強まっていく。彼の徹底した自己犠牲もあくまで彼の強い意思に基づくものである。その理屈は、「女王の栄誉を、私は守らなければなりません、だから何があろうと、/ いま、私が咎を受ければ、女王の咎は小さくなる」（4 幕 1 場）というわけである。さらに彼は、女王その人に対する殺害未遂の濡れ衣を着せられても、アマラゾントに罪の意識を免れさせてやりたいがために、自らの命も惜しまず誤った判決を受け入れる（4 幕 6 場）。

私に下される判決が、たとえ間違っていようと、
嘆いたりしたら、それこそ間違いと言わねばなりません。
私が目にし耳にすることのすべてが、
たしかに私には不利な証拠となるばかり、
そして陛下は、この証拠のもとに裁かれる以上、
罪なき者に死を命じたとしても、間違ったことにはなりません。
この残酷な結果も、私には甘美なものに思えます、
少なくとも、あなたの罪を弁護できるのですから。
私が死んだ後、間違いの後に必ずやってくる
後悔の念を、あなたが抱かずに済むようにしてくれるはず。
私の死をお望みなら、恐れることなく受け入れましょう。

しかもこの時、ついにアマルフレードは本性をさらけ出し、テオダは彼女に欺かれていたことを思い知るが、彼女を責めようとはしない。アマルフレードに対し、「愛があなたを動かしたが、私も愛の掟に従って、/ 耐えるべきことはすべて耐えるしかない」と言うのである。ここからは諦念よりもむしろ困難に立ち向かう気持ちがうかがえる。彼にとってはアマラゾントへの愛が信念となっており、命を賭してそれを貫くという覚悟を抱いているのだということがわかる。

そして最終的には、テオダは自分をかばう父の命令に背いて女王の元へ向かうことを断行し、意識を取り戻したアマラゾントと和解する。度重なる偶然によって筋が運ぶこの物語において、大団円が導かれるのは確かに主人公テオダの意思あってこそだと言える。最後に勝利を収めるのはテオダの変わらぬ愛なのである。

IV、クロデジル

キノーは、想い合う恋人たちを翻弄する人物を複数作り上げた。中でも重要な役回りをするのが大公クロデジルである。歴史の伝えるところでは、アマラゾントは多くの政敵をかかえ、数々の陰謀に悩まされ続けたが、キノーはテオダを女王の忠実な恋人に仕立てた代わりに、クロデジルをテオダの恋敵として、そして女王の真の敵としてしつらえたと言える。

クロデジルは、幕開けに口を開く最初の登場人物である。彼は友人アルサモンとともに共通の恋敵テオダの破滅を目論むが、この二人の会話から、クロデジルの策士ぶりが浮かび上がる。まず、自分たちも名門の生まれにあるのだからテオダに対して下手に出ることはないと考えるアルサモンに対して、クロデジルは冷静に現状を分析し、「やつの身分をどうこう言うより、いまの立場を見なければ」、「幸運の女神のお気に入りとあれば、ほめそやさねばなるまい」と諭す。そしてテオダの死を望むあまり気ばかり急くアルサモンに、入念に準備した策略を打ち明ける（1 幕 1 場）。

不満分子を生み出す寵臣を失脚させるには、
人目をひかない方策をとるのが、もっとも確かなやり方。
憎くても、疑いを招いたりすれば、力にはならない、
やつを重んじるふりをしながら、失脚させるのだ。
力づくで倒せないなら、
持ち上げて、それから落とせばいいだけのこと。

彼の策略は、ジュスティニアン皇帝からテオダ宛に書かれた手紙をアマラゾントに届けさせるというものであった。これはテオダを陥れる計画であると同時に、アマラゾントその人への復讐という意味合いも含んでいる。というのも、クロデジルが皇帝に内通したのは、廷臣たちの面前で女王に殺された父の恨みを晴らすためなのである。さらに、彼が女王との結婚を望むのは、愛のためでもなければ、王座さえ二次的な目的でしかない。憎しみがその一番の動機であり、彼は女王に対する残酷な欲望を露わにしている（同上）。

いや、もっとひどい目に遭わせてやる。
もっと辛い罰を与えるために、私は女王と結婚するのだ。
そう、父の復讐を果たすのに、これ以上の策はない、
私が思いつくもっとも残酷な罰、
それは、女王に結婚の誓いをさせて、
私のように奸知にたけた男の妻にすることだ。
私は女王の暴君となり、女王が生きている限り、
日々新たな苦痛を味わわせ、

死ぬ時こそが慰めの時と思わせてやる。

このように、クロデジルは冒頭から冷酷な策士として描かれる。その振る舞いは、表面上は至極冷静沈着であり、余裕さえ感じさせる。彼の意識には、大罪を犯すことに対する恐れが微塵もないのである。次の場面からも、このことがうかがえる。手紙を使った最初の策略が失敗に終わったと知ると、クロデジルはいよいよ直接手を下す覚悟を決める。アルサモンと組んでテオダの殺害を企てた彼は、アマルフレードにその計画を打ち明ける。人殺しはおぞましい罪で、テオダの幸運のみを妨げて命は助けるべきだと訴える妹に対して、彼は独自の倫理観をもって自身の行いを正当化する。「王冠は、そこに近づくものを清めてくれる、/ だから、どす黒い罪でさえ目指す王座に導いてくれるなら、/ 王座の輝きによって、輝かしくなるのだ」(3 幕 1 場)。罪悪感など少しも抱いていないどころか、復讐それ自体が彼にとっては正義と化しているのだということがうかがえる。

クロデジルは父の復讐を果たさなければならないという信念を持って行動する。憎しみが彼を突き動かすのであり、彼がアマラゾントに愛を抱くことはない。しかし、相手を強く思い続けるという点では、愛と憎しみは似た性質のものと言える。計画が次々に頓挫し、恋敵を始末するどころか同士であるアルサモンを誤って殺害してしまうという失敗を犯したクロデジルは、徐々に焦りを示し始める。同時に、思うように動かない女王への憎しみも募っていく。そして憎しみが極致に達した時、クロデジルはついに冷静さを失い、その錯乱した気持ちを吐露する (4 幕 10 場)。

目の見えない女王よ、私が従うとでも思うのか？
いいや、おまえが不当に振る舞う以上、もう忠告などいらない、
おまえには従えない、おまえを真似てやるのだ。
おまえは忌まわしい恋に引きずられ、
罪があると知りながら恋人を救うのだから、
私もおまえのように恋に狂って
無実と承知の恋敵を破滅させてやる。
女王よ、おまえを恋するあまり、後先も考えず、
やつの恩赦を願うようなことをしてしまった。
だが、よいか、あの憎い恋敵を、なんとしてでも
殺してやる、助けてなどやるものか。

この独白からは、クロデジル自身が、女王への憎しみを恋する気持ちと取り違えていることがわかる。そして、ここでの爆発的な憎しみの発露は、それまであくまで機械的な極悪人として表れていた彼に、少なからず人間らしい感情の起伏があることを明らかにする。

最後には、クロデジルはまさに恋に狂ったように前後不覚の状態に陥り、テオダ宛の毒入りの手紙をそれと知らずに開けて読んでしまう。死の際に至って、彼はトゥディオンに自らの罪とテオダ

の無実を告げ、この宰相の腕に抱かれるようにして息を引き取る。それまでの言動とは裏腹に、最期になって唐突に自らの罪を認めるのである。この豹変は不自然にも思われるが、それはテオダが言うように単に「後悔の念が罪深い心を動かし」(5幕9場) たからではなく、テオダの父であるトゥディオンに自らの父を重ねたからだと考えられる。クロデジルは確かに悪人だが、その策略はひとえに父を想うが故の復讐心からであった。キノーは、最後には一抹の憐れみの念を抱かせるような存在としてクロデジルを描いたのだと言える。いずれにせよ、数々の策略を仕組んだクロデジルは、結局は自らが種をまいた罠に掛かり、破滅するのである。

V、アマルフレード

アマルフレードについて最初に印象づけられるのは、テオダを熱烈に愛しているということである。侍女ユルシードとの会話を通じて、アマルフレードの想いの強さが強調される。侍女にテオダを愛していると打ち明けた彼女は、「愛している」という言葉を何度も繰り返し訴えるのである (1幕7場)。しかし、その想いは一方的なもので、テオダの方はこちらがまるで眼中にない。だから、ほとんど率直に彼女が想いを伝えても、テオダはそれに気づくことなく、返ってくる言葉は彼女にとって非情なものになる。テオダはアマルフレードその人に対して、愛する女王への伝言を頼み、「女王に会えないところでは、愛すべきものなど何もない、/どんな美しい人も、私にはおぞましい」と言ってのけるのである (1幕8場)。そのような辛い状況に追い込まれた彼女の抱く愛は、テオダのそれとはまったく対照的なものになる。アマルフレードを特徴づけるのは、まず、極めて自己中心的な性格である。それは彼女も自覚しており、自身に想いを寄せるアルサモンと自分を重ね合わせて、次のように自己分析する (1幕7場)。

> そう、それにあの人には真心も信念も欠けている、
> 愛される資格などありません、でもその点では私も同類。
> ただ罪だけが私たちを結びつけることができる、
> だから私はあの人のことが嫌いなのです、私に似ているから。
> 捨てた美徳には、いつも魅力があります、
> 人はしょせん、自分が持っていないものしか愛せないもの。

彼女の愛し方は、相手のためではなくむしろ自分のためを思うものである。彼女の場合、相手のためになるよう行動すれば、それがそのまま自分の恋路を妨げるどころか、恋敵との仲を取り持つことになってしまう。ゆえに、テオダからアマラゾントへの恋文を託された彼女は、テオダを裏切る決意をし、「私はテオダを愛しているけれど、わが身はもっと大事」だと言い切る (1幕10場)。

また、気分の変わりやすさも、アマルフレードの特徴である。彼女の愛は、怒りを契機にして憎しみや復讐心へとたやすく移行する。アマルフレードがクロデジルに言うことには、彼女の怒りは

兄のねたましさゆえの怒りと同種のものであり、彼女を駆り立てる怒りの炎は「恋をかき立てるどころか、恋を滅ぼしつくすもの」(3 幕 1 場) なのである。女王に会うという名目でアルサモンに連れられて行くテオダを目にした彼女は、テオダの心の高ぶりを思って強い怒りに駆られ、彼の死をも望む (3 幕 3 場)。

それにテオダがどれほど女王に想いをよせているか考えると、
私が抱いていた恋は、怒りに変わり、
いまこの心に感じるのは、愛よりも激しい怒り。
そう、テオダなど大嫌い、もう未練はないわ。
いまはもう、復讐のことだけ考えよう、
いまや彼の破滅がただひとつの願い、
彼の死を喜んでみていられるでしょう、

ところが、この直後にやってきたクロデジルからいざテオダの殺害を告げられると、悲痛な思いを抑えることができず、女王の怒りにかこつけて兄を糾弾する。アマルフレードはまるで相手を愛してなどいなかったかのように憎み、そうかと思えば次の瞬間には憎しみを忘れたかのように愛しているのである。彼女のテオダに対する想いに一貫性はなく、それは愛というよりも執着に近い性質を帯びている。

アマルフレードは恋する相手を窮地に追いやることも厭わず、次々に策略をめぐらせる。ただ、その策略はどれも場当たり的で計画性を欠いている。彼女の行動は一見狡猾なようだが、その実非常に衝動的かつ直観的なのである。そうした短絡的性格ゆえに、テオダがジュスティニアン皇帝と通じたという嫌疑をかけられた時、テオダが女王を裏切ろうとするのならば、彼が愛しているのはほかの女性、すなわち自分かもしれないという強い願いが思い込みに変わり、テオダに本当の気持ちを打ち明けられた時、裏切られたという憎しみを抱くに至る (1 幕 7~8 場)。クロデジルがテオダの失脚とアマラゾントへの復讐を入念に計画しているのとは対照的に、アマルフレードはその時々の思い付きで罠を仕組む。それが結果的に、兄の策略の失敗を補うことになる。ただし、アマルフレードの策略は概してうまくいくものの、たまたま運が良かったに過ぎない。まず、彼女はテオダの恋文を自分宛だと思い込ませることで女王の嫉妬心を煽るが、テオダはそれ以前に女王に対して弁解の機会を与えられており、その折に彼が恋文について言及していれば、結果は変わっていたはずである。さらに、彼女はテオダに女王殺害未遂の濡れ衣を着せることに成功するが、そのやり方は眠っている女王の目と鼻の先でテオダに無理矢理剣を握らせるというものであり、あまりに唐突かつ強引である。それに、テオダ本人に対して協力的な自分をつくろうことができなくなった以上、アマルフレードにもはや望みはない。こうして、反射的に編み出した策略やとっさの行為が積み重なり、徐々に彼女自身の首を絞めていくことになる。最後には、アマルフレードは自分が仕組んだ策略の自然な成り行きとしてテオダが死んだ (ように思われる) ことが受け入れられず、自ら命を絶つ (5

幕6場)。

私の思いをかえりみない、あのつれない恋人が
恋しくもあれば憎くもある。
憎しみゆえにあのひとを破滅させはしたものの、
恋しさゆえにあのひとの復讐をせずにはいられない。
だが、復讐のため容赦なく
われとわが身を滅ぼしはしても、恋敵は、生かしておきましょう、

死に際して、彼女の恋心は完全に復讐心へと転換している。彼女は一方で恋敵に罪を自覚させることで死ぬほどの苦しみを与えながら、一方では死を以て自らの苦しみを終わらせる。彼女はテオダのための復讐を謳ってはいるが、これは最後までテオダに愛されなかった恨みを晴らすための、すなわち彼女自身のための復讐に過ぎない。

結局のところアマルフレードは、兄クロデジル同様、自らの奸計に陥り命を落とすわけである。この兄妹は、片や復讐のため、片や恋人を奪うため、手段を選ばない。どちらも憎むべき存在として描かれる。しかし、アマルフレードの目的は最後まであくまでテオダなのであって、その愛は憎しみや復讐心に変わりはするものの、彼女は確かに彼を想い続けている。だからこそ彼女には苦しみがあり、それが観客に憐れみを催す。他方、クロデジルは愛を抱くことがなく、ほとんど観客の共感を呼ばない存在である。兄の存在が、アマルフレードを相対的に人間味ある人物として浮かび上がらせていると言える。

VI、アマラゾント

キノーは、マザランに宛てた献呈文の中で、実在したアマラゾントについて「この女王は、かつてその時代の傑物としてあった人物であり、私は間違いなく、彼女を墓から出しながら、彼女の古の輝かしさの多くを隠しはしなかった[11]」と記しており、悲喜劇のヒロインとして選んだこの人物を非常に積極的に捉えていたことがわかる。ただし、キノーはアマラゾントを史実通りの剛胆な女王としては描いていない。テオダの人物像に大幅な改変を加えたのと同様、キノーはアマラゾントについても歴史が伝えるところとは異なる人物に仕立てている。というのも、この作品において最初にアマラゾントについて印象づけられるのは、女王としての気高さに相反する未熟さなのである。彼女の未熟さは、その政治的な立ち位置に端的に表れている。史実とは異なり、アマラゾントには亡き大王の命でテオダの父トゥディオンが摂政についており、「女王は何をするにもその意向に沿うばかり」なのだということが冒頭でクロデジルによって語られる（1幕1場)。その一方で、アマラゾントがかつてある疑惑からクロデジルの父を処刑したという事実も明らかにされ、歴史と違わない女王のしたたかな一面も垣間見える。

このヒロインは2幕になって初めて登場するが、そこでの侍女セランドとのやり取りを通じて、アマラゾントの優柔不断さが浮き彫りにされる。事の次第は次の通りである。ジュスティニアン皇帝からテオダ宛に送られた偽の手紙を受けて、女王はテオダを連行して来るようトゥディオンに命じたものの、テオダを目の当たりにして愛おしさを覚えてしまうことを恐れ、侍女に頼んでテオダが来るのを止めさせようとする。しかし、強く命じることができず、何度も侍女を引き留める。アマラゾントの心は激しく揺れ動くが、とうとう、彼をそのまま来させてしまう。彼女の態度に困惑する侍女に対して、女王自身も動揺を隠せない（2幕2場）。

何を決心するのか、女王らしくもなく？
本心を明かさずに、裏切り者に会うことができるのか？
あの心ひかれる裏切り者に、誤って
王座とともに心まで差しだしてしまったのに。
盲目の女王よ、いったいできると思うのか？
おぞましいとも、いとおしいとも思わずに、彼に会うことが？

アマラゾントのこの不安定な気持ちの根底には、盲目的な恋心とそれゆえの猜疑心がある。恋人を想う気持ちと女王としての尊厳の間で板挟みになった彼女は、この時点では政治的な状況よりも個人的な心情に重きを置いており、無自覚にせよ君主である前に女性としての判断を優先している。ゆえに、テオダから愛を訴えられるとそれだけで彼が許されるのに十分な理由だと感じ、彼に王冠を約束する。

ところが、テオダの臣下としての忠誠心ではなく恋人としての愛が疑われた時には、寛容な態度を一変させる。テオダがアマラゾント宛に愛を告白した手紙をアマルフレードへのものだと誤解した女王は、すぐに目通りを禁ずるのである（2幕6~7場）。つまり、愛の裏切りをこそ政治的な裏切りの証拠と見ているわけだが、ここでその判断を後押ししているのは、紛れもなく女王としての尊厳である。というのも、女王であるアマラゾントにとっては、義務や公正さが重要な指標になる。その意味では、テオダの父であるトゥディオンの存在が、構造的にテオダの恋人としてのアマラゾントを引き立たせている。彼は父としてテオダを愛しているが、摂政という立場にあるために息子に肩入れしてはいけない。アマラゾントも恋人を愛してはいるが、それでも女王としての義務を全うしなければならない。二人は同種の葛藤を抱いているのである。そして、アマルフレードやクロデジルの策略によって試練にさらされる度にアマラゾントの愛は強まるものの、それを抑制する義務感も愛に比例して強まっていく。アマラゾントがテオダの死刑を決めたのは、テオダがアマルフレードを愛していて自分を憎んでいるのだと思い込んだからというだけではない。国家に対する反逆と王族の殺害および殺害未遂の咎で罰するのである。これは女王としての義務を優先した結果であって、直接恋人に会っては公正な判断ができないと思ったからこそ、彼女は毒入りの偽の恩赦の手紙を人づてに渡すという間接的な手段を採ったのだと言える。だから彼女は、テオダの完全な無

実を知らされないうちは、自分が仕込んだ毒で恋人が死んだと思い、苦しみはしても、罪の意識は感じていない。実に、アマルフレードに自らのしたことを告げた彼女は、「私は義務を果たしたのです」と言い放つ（5幕2場）。女王として罪人を裁くことは正義であり、そうすることが女王としての徳性に繋がるのだというアマラゾントの考えが、彼女の次の台詞に表れている（同上）。

ああ！徳の喜びとはなんと不完全なものか、
意に反してでも徳を行うときは、
二者択一を迫られて、なんと心が痛むことか、
正義に従うため、望むことを諦めなければならないのです。

アマラゾントもアマルフレード同様に嫉妬深い女性ではあるが、その嫉妬心はアマルフレードのそれとは異なる性質のものである。アマラゾントの嫉妬心は段階を踏んで強まっていき、なおかつその気持ちは常に恋心ないしは愛と共存している。嫉妬心から相手を憎もうとはしても、愛をすっかり忘れてしまうようなことはない。アマラゾントにとって愛は女王としての弱さにつながるものであるから、彼女自身が意識して何度も気持ちを捨ててしまおうとするものの、その都度失敗している。恋人を手にかける決意をした時でさえ彼女は恋心を拭い去ったわけではないことが、次の台詞からわかる（4幕8場）。

もはやこれまで、おぞましい怪物、人でなし、
処罰は決まった、おまえの死は避けられない。
今日のうちに、薄情なおまえは、
愛の神ではなく、死の神の手に渡されるのです。
宿命の炎の残り火よ、
あの残酷な男がこの心に芽生えさせた、
消すことができない恋の火よ、もう私を苦しめないで、
おまえを生んだあの男とともに、死ぬがよい。

彼女の内面の激しい葛藤が、逆説的に彼女の愛の強さを証明している。アマラゾントの愛は、女王という立場ゆえの厳しさや残酷さを伴ってはいても、実質的にはテオダのそれと同様に変わらぬ愛と呼べるものである。最終的に、テオダが忠実な恋人として死んだと知らされた彼女は、愛の神に許しを乞い、女王としての義務をも放棄して、死によって恋人と結ばれようとする。アマラゾントの中で、愛が暴力的な強さを持ってすべてを凌駕していく様が、彼女の独白において丁寧に描写される（5幕7場）。自らの心に、次いで目に、口に訴えかけた彼女は、とうとう苦しみのあまり気を失ってしまう。そして、彼女と同様に愛の神に誘われたテオダが、アマラゾントを助け起こすのである。

おわりに

キノーは『アマラゾント』を悲喜劇として編むにあたり、歴史を題材としながら、それを彼独自の物語に作り替えた。この物語の世界では、政治的な問題はすべて愛の問題と密接に絡み合い、登場人物たちは愛の促すままに行動する。見方を変えれば、『アマラゾント』は劇作品の形をとりながらある種の恋愛論の様相を呈している。実に、折々に登場人物たちが愛について語らう様は、サロンにおける会話を彷彿させる。

ただし、見てきたように、人物によって愛は異なる性質を帯びている。まず、テオダにおいて、愛は服従という形で現れていた。彼にとってはアマラゾントが絶対的存在であり、女王のためとあらば自身の名誉や命をも投げ打つ覚悟が彼にはある。言わばギャラントリーの極致のような愛である。テオダの人物造形について、キノーが意図したのは「洗練の域に達した犠牲的精神を描き出すこと」だとグロは指摘している[12]。それは歴史の伝えるテオダ像と完全に異なっているが、この改変は時代の要請に適うものであり、キノーは観客の嗜好に合わせて理想的な主人公を練り上げたのだと言える。

また、二人のヒロインの性格には共通点があるものの、その愛し方は実のところ至極対照的であった。アマルフレードの愛は憎しみとの互換性を備えており、彼女の感情は目まぐるしく切り替わる。一方でアマラゾントの愛は、時に彼女自身が憎しみに変えてしまおうと努めはするものの、決して変わることなく存続する。アマルフレードのような嫉妬にまみれた女性は、17 世紀フランス演劇における典型的な登場人物であり、ともすれば凡庸な型に陥りやすい。グロはアマルフレードについて「絶え間なく代わる代わる豹変する様の幼稚さと単調さ」、「感情の乏しさ」、「性格の冷淡さ」を批判し[13]、アマラゾントの「この（愛と憎しみの）共存、《同時性》こそキノーが描きたかったもの」だと言う[14]。しかし、ブルックスも言うように、アマルフレードに見られる「嫉妬深く怒りに駆られた女性の不確かさと一貫性のなさそれ自体がまさに性格描写の要素[15]」と捉えられる。それに、彼女と対置されることで、アマラゾントの抱く真実の愛が際立つのであって、アマルフレードの存在は物語に精彩を与えている。

クロデジルについても同様のことが言える。アマルフレードの存在がアマラゾントを際立たせているように、冷酷で奸智に長けたクロデジルの存在は、テオダの純情さと盲目的な愛をより鮮明に浮かび上がらせる。また、クロデジルとアマルフレードはともに恋敵や実らぬ恋の相手を陥れることを謀りながらその動機や性格は対照的であるが、このコントラストは、想い合いながらもすれ違うテオダとアマラゾントの関係性に見られるコントラストを相対的に強調している。同時に、この兄妹が悪役・脇役として存在することで、テオダとアマラゾントが善人として、そして主役として引き立てられる。

すなわち、この作品における主要人物は愛の性質を基準にしてふたつのグループに分類される。テオダとアマラゾントに象徴されるのは「変わらぬ愛」ないしは「美徳」である。対して、愛を抱かないクロデジルや、自らのために愛する者の破滅をも厭わないアマルフレードは、「悪徳」と結び

つく人物だと言える。喜劇や悲喜劇において最後に勝つのは「美徳」の方であり、この作品でもやはり「変わらぬ愛」に軍配が上がる。

こうして登場人物たちの愛し方を比較することで、キノーが意図的に彼らを差別化しながらそれぞれの人物像を作っていることがわかった。キノーにおいて、愛はもはや単なる熱情の類ではなく、性格描写の要素として体系づけられている。そのうえ、登場人物の性格描写は筋立てと密接に関連している。悪役の一人によって仕組まれた陰謀に始まるこの物語は、悪役二人が次々に繰り出す策略に応じて主役二人が動き、動かされ、物語が展開していくのである。すでに述べた通り、この作品においては度重なる誤解と行き違いが意味を為し、いくつもの偶然がそれを支えている。キノーは偶然の積み重ねの結果をもっともらしく描き出すことに成功しているが、それは丁寧に造形された登場人物たちの性格がその行動に必然性を与えているからこそである。実に、『アマラゾント』は「話は巧みで」、「美しい場面に満ち」、「洗練され、愛あふれ、心に触れる作品」として多くの観客を魅了した。主人公とヒロインが結ばれる結末によってキノーが示したのは「変わらぬ愛」の勝利であり、キノーの描く物語には愛の力が漲っている。ラ・アルプが言うように、「ウェルギリウスが女神の髪と衣服から立ち込めるアンブロシアの香りで我々にヴェニュスを識別させるのと同様に、キノーを読んだばかりの時には、愛の神や三美神が今しがたまで我々の近くに居たように思えるのだ。」

この傑作を生みだしたキノーは後にオペラに取り組み、劇作で培った才能をこの新しい芸術において存分に発揮する。ヴォルテールは、この劇作家が音楽家リュリに巡り合ったことをルイ 14 世の時代の大きな幸福のひとつとし、次のように述べている。

> キノーが実に見事に表現した甘く激しい恋情は、その才筆のおかげで、淫奔な道徳どころか、人間の心情の真実に迫る描写となる。リュリの芸術がキノーの歌詞に命を与える以上に、キノーはその台詞回しによってリュリの音楽に命を与えた。

キノーが描く愛に満ちた物語は、オペラの甘美な音楽によくなじむものであった。「リュリの音楽に命を与えた」その才筆は、確かに劇作家としてのキャリアを通じて磨かれたものである。『アマラゾント』の分析から、キノーにおいて愛が人物造形の重要な要素となっていることが明らかになったが、今後の研究では、キノーの劇作上の特性をさらに追究し、それがオペラにおいてどのように活かされているかを詳らかにしたい。

注

(1) Les grands Comédiens du Roy, / En pompeux et superbe aroy / Y joüérent l'*Amalazonte* / Qui charmeroit des cœurs de fonte, / Tant elle a de discours adroits, / Tant elle a de jolis endroits, / Bref, tant elle est (à bien l'entendre) / Délicate, amoureuze et tendre. (Loret, *La Muse Historique, ou recueil des lettres en vers conteannt les nouvelles du temps*, éd. Livet, 1877, t.II, pp.410-411, cité par William BROOKS,

Philippe Quinault, Dramatist, Pieterlen and Bern : Peter Lang, 2008, p.163.)

(2) *Ibid.*, p.162.

(3) Les comédiens de l'hôtel / Représentant un poème tel, / C'est-à-dire si beau, si rare, / Qu'aux plus charmants on le compare, / De tous il mérite l'aveu, / Et chacun y court comme au feu… / Bref, son excellence est extrême, / Jusque-là que notre Roi, même, / Qui, Mercredi, le vit jouer, / Prenant plaisir à le louer, / En trouva tous les vers si justes, / Qu'il fit un présent de cent Justes, / (Ce m'a dit la belle Pinaut) / A son Auteur, nommé Quinault, / Dont tout exprès j'ai voulu mettre, / Ici, le nom en grosse lettre : / Car j'aime fort les bons esprits. / Enfin ce poème de grand prix, / Et dont mille biens on raconte, / A pour titre l'Amalazonte. (Loret, t.II, p.497, cité par Étienne GROS, *Philippe Quinault: sa vie et son œuvre*, Paris : Champion, 1926, p.43.)

(4) William BROOKS, p.164.

(5) シャプラン (Jean Chapelain, 1595-1674) は、古典主義理論家の立場からキノーについて好意的なコメントを差し控えたが、それでも「キノーは基礎と技巧に欠けるが恋の繊細さをうまく表現する素質に恵まれた詩人である。」« QUINAULT. - Est un poète sans fond et sans art mais d'un beau naturel qui tourne bien les tendresses amoureuses. » (Jean CHAPELAIN, *Opuscules critiques / Jean Chapelain ; édition Alfred C. Hunter ; introduction, révision des textes et notes par Anne Duprat*, Genève : Droz, 2007, p.407.) と認めている。

(6) 伊藤洋 , 皆吉郷平 , その他 訳『フランス十七世紀演劇集—悲喜劇・田演劇』八王子 : 中央大学出版部 , 2015, pp.490-621.

(7) Étienne GROS, 1926, p.304.

(8) Procope, *De bello Gothico* / Cassiodore, *Variarum libri XII et Chronicon ad Théodoricum regem* / Jornandès, *De rebus Geticis* (*Ibid.*)

(9) William BROOKS, p.166.

(10)「自分の経験からもわかりすぎる、/ 会うことと愛することは、ほとんど同じなのだわ。」(3 幕 3 場)

(11) Une Reine, qui fut autrefois la merveille de son Siecle, & je ne doute point qu'en la faisant sortir du tombeau, je ne luy aye desrobé beaucoup de son ancien éclat; (Philippe QUINAULT, *Amalasonte: tragi-comédie*, Paris : Abraham Wolfgang, 1662, p.vi.)

(12) Étienne GROS, p.423.

(13) *Ibid.*, p.450.

(14) *Ibid.*, p.476.

(15) William BROOKS, p.206.

(16) « comme Virgile nous fait reconnaître Vénus à l'odeur d'ambroisie qui s'exhale de la chevelure et des vêtements de la déesse, de même, quand nous venons de lire Quinault, il nous semble que l'Amour et les Grâces viennent passer près de nous. » (Jean-François de LA HARPE, *Cours de littérature ancienne et*

moderne, Paris : Librairies Didot, 1840, p.662.)

(17) ヴォルテール『ルイ十四世の世紀４』丸山熊雄訳、東京：岩波書店、2001, pp.328-329.

参考・引用文献

William BROOKS, *Philippe Quinault, Dramatist*, Pieterlen and Bern : Peter Lang, 2009.

Jean CHAPELAIN, *Opuscules critiques / Jean Chapelain ; edition Alfred C. Hunter ; introduction, révision des textes et notes par Anne Duprat*, Genève : Droz, 2007.

Sylvain CORNIC, *L'enchanteur désenchanté : Quinault et la naissance de l'opéra français*, Paris : Presses Université Paris-Sorbonne, 2011.

Étienne GROS, *Philippe Quinault: sa vie et son œuvre*, Paris : Champion, 1926.

Jean-François de LA HARPE, *Cours de littérature ancienne et moderne*, Paris : Librairies Didot, 1840.

Philippe QUINAULT, *Amalasonte: tragi-comédie*, Paris : Abraham Wolfgang, 1662.

Philippe QUINAULT, Carine BARBAFIERI, *Théâtre complet / Philippe Quinault*, Paris : Garnier, 2015.

伊藤洋 , 皆吉郷平 , その他 訳『フランス十七世紀演劇集―悲喜劇・田演劇』八王子：中央大学出版部 , 2015.

ヴォルテール『ルイ十四世の世紀４』丸山熊雄訳、東京：岩波書店、2001.

中央大学人文科学研究所 編『フランス十七世紀の劇作家たち』八王子：中央大学出版部 , 2011.